

## 「私の中の神」

### ルカによる福音書 23章44～47節

聖学院大学人間福祉学部兼心理福祉学部チャプレン 五十嵐 成見

昔のことですけれども、沖縄県に美ら海水族館というところがありまして、そこに行ったことがありました。その水族館の名物は、大きな大きな水槽を見ることができることで、そこで印象的であったのは、その水槽の中に、悠々と泳いでいる鯨をみたことです。

堂々と悠々と他の魚たちと一緒に、その水槽一杯に泳いでいる、佇んでいるその鯨の姿を見ていると、どこか自分の心の中にも、そのような鯨が悠々と、堂々と佇んでいるような気がして、不思議に平安な気持ちにさせられたことを覚えています。その水槽の目の前でずっと静かに鯨を見ていると不思議に心が落ち着いて来るのを感じました。

今日の聖書箇所は、イエス・キリストが、十字架につけられる時の場面です。イエス・キリストは、この十字架につけられた時、7つの言葉を語られたと聖書に記述されています。その7つの言葉の1つが、この最後の「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」という言葉でした。

恐らく、7つの言葉の最後にこの言葉が語られたのではないかと思います。けれども、この言葉の前に、マタイによる福音書というところによりますと、イエス・キリストは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」(27章46節)と叫ばれたとも書いてあります。

「なぜ、わたしをお見捨てになったのか」。これは神への絶望の叫びです。イエス・キリストも、死を迎えることを前に、「なぜ、神はわたしをお見捨てになったのか」と訴えるほどに、絶望の心を持っていた。私たちもしばしば絶望の心を持ちますけれども、私どもと同じように、そしてそれ以上に、絶望の心を抱えたという表れの言葉です。

けれども、そのような言葉の最後にも、「このわたしの霊を御手にゆだねます」と言うことができました。イエス・キリストはその死の苦しみを、最終的に「あなたの御手にゆだねます」と言って、平安の心の中で、十字架の上で亡くなられたのです。

そして、どうしてそのようなことが可能だったのでしょうか。死の苦しみを前にしても、なぜ最終的に、そのような静かな落ち着き、平安の心を持って、十字架上で亡くなることができたのでしょうか。

それは、イエス・キリストのうちに堂々と、悠々と佇んでいる神がおられたことを、キリストは信じたからです。譬えて言うならば、あの水族館の大きな鯨のように、イエス・キリストの内に、その存在深くに、父なる神がおられて、どっしりと構えていらっしゃるから

です。

どのような心であっても、そのようなどっしりとおられる私を超えた絶対的存在がいる。そのことをイエス・キリストは信じ抜いたのです。

私たちも、しばしば心惑うことがあります。動揺して、不安になって、どうしていいかわからない、そういうことに巻き込まれます。騒乱、動乱が私たちを取り巻くことがあります。

けれどもその時、私の内に、たとえ私の心が惑っていたとしても、堂々と悠々と自分の存在そのものの奥深くにいてくださる鯨のような存在。そのような神の存在がおられる。そのことを信じると、そのような惑う中であっても、落ち着きと平安の心が、どこかで備えられるのではないのでしょうか。

私たちの内に、そのような大きな鯨のような存在としての神がおられる。それを信じると、私たちは恐れを克服できるのではないのでしょうか。不安がありながらも、なお勇気ある一筋の心を持って生きることができるのではないのでしょうか。そのような福音の下に、イエス・キリストは十字架上で死に、そして、復活されていきます。

私たちも、この福音に生かされていきたいと思います。それではご一緒にお祈りをいたしましょう。

主イエス・キリストの聖なる神さま、私たちの内に、恐れ、不安、おじまどう心があります。けれども、私たちのその心の深いところで、どっしりと悠々と私の存在を支える神がおられます。その神を見つめる時に、私たちの心に落ち着きと平安が備えられます。どうかあなたを見上げつつ、あなたを見つつ、生きる者とさせてください。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。

2020年10月27日 聖学院大学 全学シリーズ礼拝「苦難を乗り越える」